

映像作品におけるトランスジェンダー女性の言葉遣い

——メディアにおけるジェンダー・ステレオタイプ変容の可能性について——

陳 一 吟

メディアが作る日本語は、自然言語との間に隔たりが存在しながらも日本の社会・文化を反映し、深い影響を与えるものである。日本語とジェンダーの関係においては、メディアで観察できる日本語はジェンダー・イデオロギーを反映し、再生産しているとの指摘がしばしばされている（中村 2007、水本 2010）。近年、ジェンダーに対する社会的な関心が高まってきている中、テレビドラマや映画等の映像作品ではジェンダーの規範を越境している LGBT キャラクターが増えてきている。

かねてよりメディアによって「ゲイ」・「オカマ」＝「おネエことば」という実社会とずれたイメージが作り出されていることが指摘されてきた（中村 2007、クレア 2013）。しかし、近年の映像作品では「おネエことば」を話さない「ゲイ」や、豊かなバリエーションを持つトランス女性等様々なタイプのキャラクターも現れてきている。言葉遣いの分析を通じてメディアにおけるジェンダー・ステレオタイプの形成・変容のメカニズムを解明することは日本語の多様性、ジェンダーの多様性に繋げていくために有意義だと考えられる。

そこで本研究は近年の映像作品¹⁾に現れたトランス女性の言葉遣いに焦点を当て、談話分析を用いてジェンダーの視点から登場人物のセリフを分析する。対象のキャラクターがどのような言語資源を用いて役作りされているか、またそれによってどのような人物像が形成されているかを解明する。主なりソースとなる言語資源の違い、そしてその言語資源の活用の仕方によって作り上げられる人物像が異なってくる。本研究はその2点を基準に観察し、その結果、対象のキャラクターが以下の4種類に分けられた。

①「おネエことば」²⁾を一貫して使う者

「役割語」³⁾としての「おネエことば」を主なりソースとしたキャラクターは「ゲイ」「オカマ」と結び付けられることが多く観察された。それによって「男でもなく、女でもないまがい物」というステレオタイプが作り出される。（発話例 ルビー：あんた、ぶすっとしたブスなんて、ばばあのオカマより嫌われるわよ。『メゾン・ド・ヒミコ』）

②「女性的表現」⁴⁾を多用する者

「女性的表現」をリソースとしたキャラクターは伝統的な女性像を思い起こさせ、そこから「女性よりも女性らしい女性像」が生まれる。（発話例 りんこ：やめてよ。料理なんて、本見れば誰だってそれなりにできるのよ。『彼らが本気を出して編むときは、』）

③中立的表現⁵⁾を多用しながらも「女性性」を想起させる者

この種のキャラクターは中立的な表現を主な言語資源にしているが、「可愛らしさ」「柔らかさ」「丁寧さ」と結びつく表現を使うことで「女性性」を想起させることができる。それによって実社会に実際に存在していそうな女性像を再現し「優しくて丁寧な女性像」を浮かび上がらせる。（発話例 ともちゃん：そうだよ。でも、わたしと付き合っただけで初めてボーダーを越えたんだってね。いやだ、もう。思い出しちゃった。『女子的生活』）

④多様な表現を使い分ける者

この種のキャラクターは③の女性像から逸脱し、男性的表現、女性的表現、おネエ言葉等様々な言語資源の利用も見られ、バリエーション豊かな言葉遣いが観察される。これらのキャラクターは「女性性」を構築すると同時に、様々な表現を使用することで複合性のある「人間像」を作り出す。（発話例 みき：【女性友人向け】ただのおバカ男子なの。【男性友人向け】何聞いてたんだよ！【心内】うめえ～『女子的生活』）

上述のように、①は今までメディアで最も見られるトランス女性のステレオタイプとしての「おネエキャラ」であり、②は日本社会の規範として語られてきた「伝統的な女性像」である。③と④は実社会の女性のイメージに近い女性像であり、特に④の同じキャラクターが多様な表現を使い分ける現象はトランス女性キャラクターの複合性を示し、性別二元規範に対して問い

かけることによって閉じられたジェンダー規範が開かれていく可能性を示唆した。一方、役作りにおいて「男が女になる」というジェンダーの越境と共に、所謂「女性性」の構築が必至になってくる。そこに使われる言語資源は依然として「丁寧さ」「優しさ」「柔らかさ」等を指標とし、規範的な「女性性」から離脱する難しさも指摘した。

[注]

- 1) 【データ】映画『メゾン・ド・ヒミコ』2005年公開、アスミック・エース / 『ハイヒール革命!』2016年公開、新日本映画社 / 『彼らが本気を出して編むときは、』2017年公開、スールキートス / ドラマ『問題のあるレストラン』2015年放送、フジテレビ。『偽装の夫婦』2015年放送、日本テレビ / 『女子の生活』2018年放送、NHK
- 2) マリィ (2013) に指摘されているように、メディアの「おネエことば」は「おネエキャラクター」を演じるタレントの「おネエキャラの言葉」である。
- 3) 金水 (2003: 67) によると、「役割語」とは「特定の人物像を思い浮かべることができる」ことば遣いである。
- 4) 伝統的な「女性」のイメージを想起させる表現を指す。例：終助詞「のよ」「わよ」等
- 5) ジェンダーと結びつくことのない表現を「中立的表現」と定義する。例：終助詞の「ね」、「よ」等

[参考文献]

- 金水敏 (2003) 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』, 岩波書店.
クレア・マリィ (2013) 『「おネエことば」論』, 青土社.
中村桃子 (2012) 『女ことばと日本語』, 岩波書店.
水本光美 (2010) 「テレビドラマ——ドラマ語としての『女ことば』——」, 中村桃子編, 『ジェンダーで学ぶ言語学』, pp. 89-106, 世界思想社.

(ちん いいん・筑波大学非常勤講師)